

枯木灘で、会いましょう。

枯木灘/河出書房新社

情報メディア学科 出縄 悠

自然と労働、家族、愛、そして、血。紀州、枯木灘の狭い路地を舞台に、複雑な血縁関係が主人公・秋幸を中心にぐるぐると渦を巻いていく。父の違う兄や姉、母の違う弟や妹。意図して視界に入れまいとしている『蠅の王』は、絶えず噂として秋幸の視界をちらつく。その男は、その、共に暮らしたことさえない男は、秋幸の行動に、心に、そして秋幸のからだそのものに影響し続けている。ろくな言葉さえ、交わしたこともないのに。

血縁に雁字搦めにされた秋幸は、それ以上に深く広大な自然に包まれている。山肌に立ち、木と共に陽に照らされ、風に吹かれ、山の一部としてゆらめく。そこにいるのは一人の『秋幸』であり、ただ一人、ただそこに存在する人間でしかない。そこには体内に流れる血も、男の影も、なにもかもが関係しない。

誰もが経験するであろう、他人と関係し家族と関係する『自分』と、自然の一部でしかない『自分』。そのどちらもが自分であり、そのどちらもが『本質』とは、きっと言い難いのだ。私の本質は、私の心は、からだは、誰に決定づけられるものなのだろうか。私は、誰なのだろうか。紀州、枯木灘で、あなたはどこに自分を見つけるのだろうか。



中上健次
1階文庫書架
B913|N

SNSは必要ですか？

何者/新潮社

応用バイオ科学科 水野 遼

全て読み終えてもう一度冒頭から読んだとき、私は主人公に最初とまた違った印象を受けた。

「ES や筆記試験で落ちるのと、面接で落ちるのではダメージの種類が違う。決定的な理由があるはずなのに、それが何なのかわからないのだ。」

最初、この主人公の考え方が就活を冷静に分析している優等生だと共感を持っていた。しかし、主人公の SNS の裏アカウントがわかり、本当の主人公の心の闇が暴かれる。

私は、この作品の主人公に最初共感を持っていた。後半、主人公の本当の姿が友達に暴かれていくことに、自分の肌に鋭いものが突き刺さった感じがしたことを今でも忘れることはできない。

私が SNS を使うのは、誰かを観察して分析することで、かつこ悪い

姿のまま本当にあがくことができている人を見下すためだと言われた気がしたためだ。

この作品は、SNS の役割を就活の進行から暴いていく、SNS の「本質」を主人公に感情移入し、安全な場所で傍観していた読者が 299 ページから当事者になり変わることで、いきなり首根っこを締め付けてくるような感覚に陥る。

この本を読んで得られることは、SNS を使い傍観者になることの虚しさだと私は思う。



朝井リョウ
2階書架
913.6|A



神奈川工科大学読書コンテストは、学生の主体的な学びを励まし、文章作成・発表の実践力を培うことを目的として、基礎・教養教育センターと図書館の共催で開催しています。審査方法は、読書感想文による 1 次審査、および図書館 1 階での公開プレゼンテーション審査となっており、最終的に学長賞・図書館長賞・紀伊國屋書店賞および優秀賞が決定されます。2 年目となる今年度は、全学から 56 作

品の応募があり、12 月 18 日（金）5 限に開催された最終審査では、昨年度に増してハイレベルで個性豊かなプレゼンテーション合戦が繰り広げられました。

本図書館 Café Vol.5 No.2（読書コンテスト特集号）では、最終審査に進んだ 9 名の受賞作品の全文を掲載いたします。ぜひ、今後の読書と学習の参考にさせていただければ幸いです。

学長賞

「知りたい」先にあるものとは

know/早川書房

機械工学科 中川 諒

電車やバスの車内では、皆がスマートフォン画面へ釘付けになっている。掌程の大きさの道具で、多くの情報と繋がることはもはや当たり前になった。だが、よく考えればそれは異常な事態であり、人類の進歩の表れでもあるのだが、あまりに身近になり過ぎた故に、人々はそれに気が付いていないのである。顔も知らない不特定多数の人間に自らの存在が知られていると思うと、私は恐怖すら覚える。



野崎まど
1階文庫書架
B913|N

SF に分類される本作品は、急激な情報化が進んだ世界を描いている。携帯端末は過去の遺物に過ぎなくなり、人々の脳には直接情報を処理するための処置が施されている。結果、多くの情報に触れる行為はより身近になり、食事や睡眠と同じ位階にまで達してしまった。

では、人間は何故そこまでして多くの情報に触れようとするのか。それは、本書のテーマとなっている、「知りたい」という欲求に従っただけである。分からないから、怖いから、人々は未知の事柄を知ろうとする。好奇心であり、本能的なものだ。もし、あらゆる事柄を「知る」事が出来たのなら。登場人物達は、「知る」という行為に翻弄される。そして本書を締めくくる一行。あまりにも単純な欲求の先に待つ世界を、私は知りたくてならない。



総評

審査委員長／基礎・教養教育センター教授

尾崎 正延

附属図書館長／ロボット・メカトロニクス学科教授

小川 喜道

わずか 500 文字で、読み手を引き付ける。さすが最終審査に残った方々は、そうした技を持っています。文字でうまく表現する力を磨いている人は、プレゼンの場でも、他者の共感を引き出し、場の空気をそっと動かす魅力にあふれていました。今秋の第 3 回読書コンテストも多く皆さんの応募をお待ちしております。

本年度のコンテストは、昨年を上回る応募があり、成功裏に催されたことは幸いである。厳正な審査を経て、学長賞には、理系の素養がプレゼンに反映された作品が選ばれたことは、喜ばしいかぎりである。



優秀賞

批評理論入門『フランケンシュタイン』解剖講義を読んで 批評理論入門:『フランケンシュタイン』解剖講義/中央公論新社

機械工学科 飯島 康博

私は小説を読むのに直感や雰囲気しか考えておらず臨場感のみで作品の表現を楽しむ読み方をしてきました。なので、単に感触を楽しむだけで終わらない作品に対する見解をこれからは持てる様になりたいと思いました。この本はそんな感覚以外で小説を解釈する方法が記されており印象的であったので紹介しました。

本の内容は小説の読み方を小説技法篇と批評理論篇の2つに分けメアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』をテキストにしてそれぞれの方法で作品を分析して見解する力を身につけてくというものです。この本を読み、小説に対する内在的、外在的アプローチの仕方とはどういうものを把握、アイロニーなどの今まで漠然と存在に気づいていただけの修辭的表現などがあったことを知り、これらの概念を単語として認識することで読者に向けた作者の工夫や意図が読み取れるようになった気がしました。またジェンダーや文化などの小説と関係ないような視点から作品を解釈する方法があることに驚きました。これらの方法や知識を知り小説への見解の仕方を持つだけでなく、今までより印象や直感が冴えて読むことに必要な力が付いたと感じました。

また『フランケンシュタイン』は優れた技巧が凝らされており、それがどのように凝らされているかこの本を読むことで暴けておもしろいと思いました。

『だます心 だまされる心』を読んで

だます心 だまされる心/岩波書店

情報メディア学科 加藤 仁也

だますという言葉には二つの意味が存在する。一つは「本当でないことを本当だと思わせること」もう一つは「なぐさめる」という意味である。

一言にだますと言うと前者のイメージが強く悪いことだと思われやすい。しかし、この世界にはだまされることを楽しむ文化が存在するということがこの本には紹介されている。

その例が手品だ。手品は本物の超能力ではなく、技術と手先によるだましの技であるが手品を見て不愉快になる人は少ないだろう。だが、それはだまされることを楽しむ文化があるからこそであり、その文化がないところでやると悪魔の技として認識されてしまうのだ。

だますのは他人だけではなく、自分自身を知らないうちにだましてしまうこともある。それが思い込みだ。思い込みをするとその物事に関してのエネルギーは生まれるがそれと同時に固執を生んでしまう。

本の中にあるエピソードがある。牛の乳を持つと時間が分かる少年が牧場において、学者はそれについて研究をし続けた。分からずじまいで最終的に少年に聞くと牛の乳を持ち上げると向こうの時計台が見えると話した。これは思い込みによって自分をだましてしまい、周りが見えなくなってしまったのだ。だますのは悪い言葉ではない、悪いのは利益を求めて人をだますことなのだ。

SOSの猿を読んで

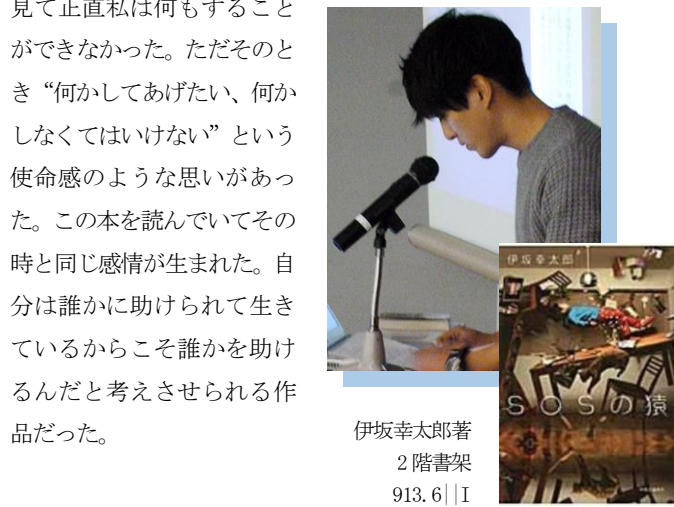
SOSの猿/中央公論新社

機械工学科 関 友佑

まずはあらすじとしてこの本の主人公二郎は困っている人がいると見て見ぬ振りができない性格である。そんな二郎に親戚の息子の眞人がひきこもりになってしまい何かにつけて来たよくだという話が入り、眞人を助けてほしいと頼まれる。以前二郎は留学先で、あるエクソシストと出会い悪魔祓いを習ったことがある。それを眞人に試したところ眞人は自分が齊天大聖孫悟空だと言いはじめる。この本はこういったあらすじで始まる。前半は“猿の話”と“私の話”のふたつの話が書かれ後半でその話が繋がってゆく。現実の世界に孫悟空が登場するリアルな描写は読んでいて不思議な感覚になった。

主人公の性格や登場人物を通してこの本が根本的に伝えたい内容として“人間だれしもSOSを見て見ぬ振りできない”ことだと思った。

主人公の二郎、また眞人もそうなのだが困っている人がいたら助けよう。助けることはできないにしても心配してしまう。これは人間だれしもが本来持っている“心”ではないだろうか。東日本大震災の時もそうだ。テレビで悲惨な現状を見せられた時、まるで自分のことのように悲しみ、何かできないかと協力してくれた人が世界にどれだけいただろう？ また、私は一度カンボジアにボランティアに行ったことがある。道端でドル札をねだる人や学校に行けない子供たちを見て正直私は何もすることができなかった。ただそのとき“何かしてあげたい、何かしなくてはいけない”という使命感のような思いがあった。この本を読んでいてその時と同じ感情が生まれた。自分は誰かに助けられて生きているからこそ誰かを助けるんだと考えさせられる作品だった。



伊坂幸太郎著
2階書架
913.6||I



安斎育郎著
B1書架
090||I||954



ホーンテッド・キャンパス～死者の花嫁～を読んで

ホーンテッド・キャンパス 死者の花嫁/株式会社KADOKAWA

応用バイオ科学科 竹村 美咲

この本は『ホーンテッド・キャンパス』シリーズの第四作目です。このシリーズは全体を通して、日常生活の中で心霊現象が起き、起きた心霊現象を主人公を含む大学生五人組が解決していくオカルトミステリものです。

私が何故この本を選んだかという、シリーズの中で一番“善意”について考えさせられたからです。物語は心霊現象を体験し現象を解決して欲しいと依頼者が主人公達に相談してきます。主人公達が事件を解決していくと、依頼者が他人とどのような人付き合いをしていたかが露わになります。この人付き合いから出てくる問題の中で一番印象深かったのが、人のことを考えない善意が時には悪意でしかないということです。他者から見ると、「あの人は良いことをしている。善意を受ける人もきっと嬉しいだろう。」と思っても、善意を押し付けられる方は迷惑と思ってしまう、または悪意と捉えてしまう等認識が変わってきます。このことから、本当の善意は相手の望むことをしてあげることだと考えました。

もちろん他人が喜ぶことはすぐには分かりません。しかし、少しずつ相手に歩み寄り相手の望んでいることを知りそのことを行うことが本当の“善意”なのではないかとこの本を通じて考えさせられました。

病気に負けたくない、ではなく病氣と共に生きていく

全盲の僕が弁護士になった理由/日経BP社

栄養生命科学科 人見 奈生子

多くの課題やレポートに追われる毎日に充実しているけれどいつか私が失明する時が来てしまったら今の努力は無駄になってしまうのだろうか……大学生活で自分の望む勉強ができていく今の環境には恵ま

れているはずなのに、こんな風に思ってしまう時があります。そんな時に出会ったのがこの本です。彼の人生を読み、この本はこれらの事について疑問を持った時や不安を抱えている方におすすめしたい作品となりました。著者の大胡田誠さんは先天性緑内障により12歳で失明してしまいます。辛い事、感動した事様々な経験を通して弁護士になった彼の人生。それは見えないからと言って簡単諦めるのではなく全盲の自分だからこそ見えてくる世界を自ら切り開き、挑戦する心を持ち続ける事でした。私も同じ緑内障です。この病気を敵にするのではなく、共に生きていく決意ができました。

心が叫びたがってるんだ。を読んで

心が叫びたがってるんだ。/小学館

情報メディア学科 渡辺 翼

この本を買ったきっかけは、今映画がやっていて小説でも読んでみようという感じだった。物語の主な登場人物は4人いて、みんな何かしら心にもやもやを抱えていてそれが吐き出せないでいた。今まで関ることのなかった4人だったがある出来事をきっかけにお互いが関りを持ち、それぞれが自分の抱えている思いに気づき自分を変えていこうとする話である。この物語の一番重要な部分は「言葉」の重さというところにあると思える。特にヒロインの成瀬順という少女は、幼いころに自分の何気ない「言葉」で家族をバラバラにしまったというトラウマがあり、それ以来、言葉を封じられてしまうのである。現実社会でも「言葉」は、使い方一つで人の生死までも左右させてしまうとても怖いものである。しかし、この物語では、「言葉」は怖いものということを伝えたいわけではなく、自分の思いを「言葉」にすることの大切さを読者に伝えていけるのだと考える。やはり、自分の中で抱えているだけじゃ人には伝わらない。それを声に出すことで相手に気持ちを伝えることができるのだとこの本を読んで改めて感じる事ができた。今、何か心にモヤモヤを抱えている人がいるのであれば、是非とも、この本を読んでみてそして何かを感じてもらえたらと思う。

豊田美加著
1階文庫書架
B913||T



榎木理宇著
1階文庫書架
B913||K

